**遠山家シンガイ稼ぎ文書**

遠山家は、19世紀から20世紀初頭にかけて、白川郷南部で最も大きく影響力のあった家だった。20世紀初頭には、御母衣の集落で48人もの一族が同じ家に住んでいたという。このような共同生活は、現在の白川村南部や北部では一般的だった。農地が少ないため、跡継ぎ（通常は長男）以外の子供が独立して家庭を持つことなく、大家族が同じ屋根の下で生活し、同じ畑を耕し、養蚕を営み続けることが多かったのである。

この資料では、大家族の中の核家族の個人的な自由を確保するために、家長が休暇を与えるなどして、大家族の中の核家族の生活を知ることができる。それは、「シンガイ」と呼ばれる制度を利用して、通常の仕事を休ませることである。シンガイ日には、夫婦と子供が一緒に過ごしたり、指定された小さな畑を耕したり、山で木の実や山菜を採ったりする。余った作物や採集した食材は、家長が買い取ることで、核家族の私的な収入となった。この資料には、この制度で家長が購入したものが記録されている。